

長崎港における貿易の移り変わり ～ 戦後80年 ～

0 はじめに

長崎港は、元亀2（1571）年にポルトガル船が入港して以来、450年以上もの永きにわたって外国との貿易港として栄えてきた港です。鎖国時代には、わが国唯一の外国との窓口として最も重要な港となり、海外からの物資や文化は、すべて長崎を通じてわが国にもたらされました。明治以降は、上海航路をはじめとして外国航路の連絡船が寄港する歴史ある貿易港として発展しました。

令和7（2025）年の今年は、太平洋戦争が終結した昭和20（1945）年から起算して満80年の年にあたることから、「戦後80年」を契機として、貿易統計に基づいた長崎港における戦後からの貿易の移り変わりを特集することとしました。

1 長崎港における戦後初期の貿易 ～時代背景～

敗戦後の日本の貿易は、連合国軍の管理下におかれ、完全な政府間貿易となり、長崎港の貿易も昭和24（1949）年頃までは輸入がガリオア基金及びエロア基金^{注1}による米国の援助物資の輸入であり、輸出は極めて低調でした。

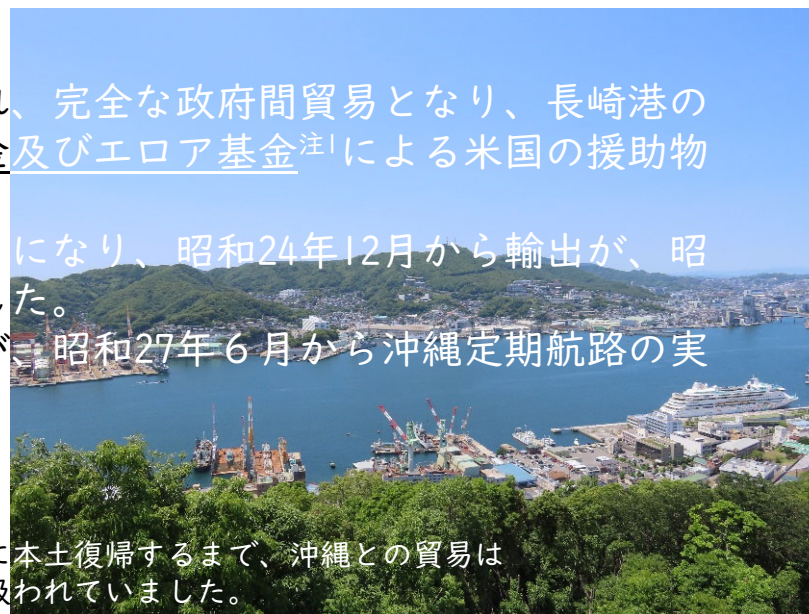
その後、制限付きながら民間貿易が再開されるようになり、昭和24年12月から輸出が、昭和25年1月から輸入が全面的に民間貿易に移行しました。

昭和25年6月には朝鮮戦争が勃発し、特需ブームが現により沖縄貿易^{注2}が活発となりました。

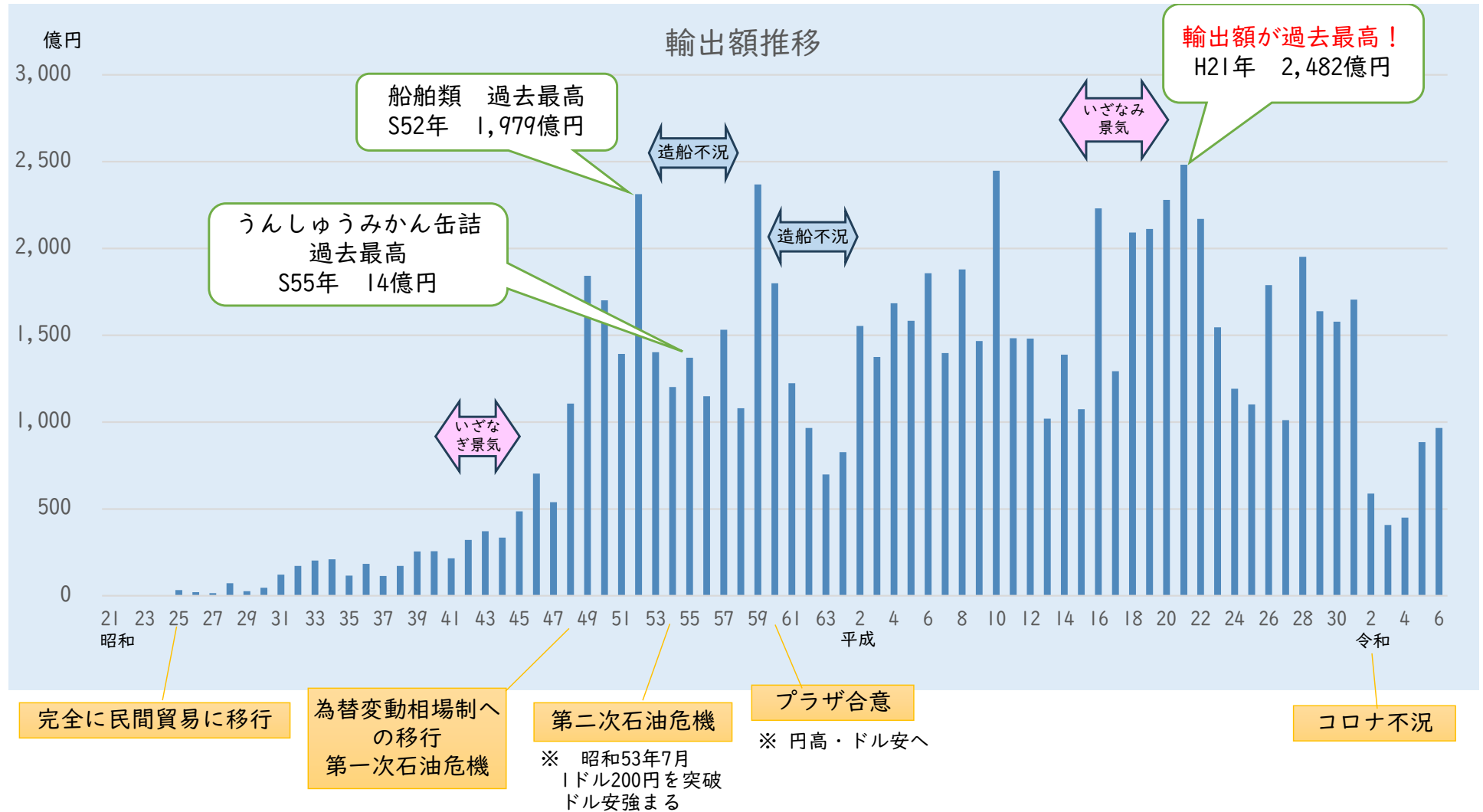
注1 ガリオア基金…アメリカによる占領地行政救済特別支出金。

エロア基金…占領地域経済復興基金。米軍予算からの支出。

注2 昭和23（1948）年に米国により統治され、昭和47（1972）年に本土復帰するまで、沖縄との貿易は国際取引とされており、日本本土とは別の経済圏として取り扱われていました。



2 長崎港の輸出動向 ～輸出額の推移～



民間貿易が全面的に再開された昭和25（1950）年の輸出額を基準とすると
 令和6（2024）年の輸出額は **29.3倍！**
 平成21（2009）年の過去最高値は **75.4倍！！**



2 長崎港の輸出動向 ～上位5品目の推移～

価額の単位：千円

昭和21（1946）年		
	品 名	価 額
1	麻袋	22
2	--	
3	--	
4	--	
5	--	
	総 額	115

昭和25（1950）年		
	品 名	価 額
1	船舶類	2,786,079
2	魚介類（缶詰）	340,382
3	電気機器	125,077
4	機械類	13,392
5	石炭	12,150
	総 額	3,292,961

昭和27（1952）年		
	品 名	価 額
1	魚介類・同調製品	1,112,725
2	機械類	216,606
3	果実及び野菜	14,548
4	めん類	11,465
5	はき物	8,731
	総 額	1,464,493

※ 昭和25年6月 朝鮮戦争が勃発し、特需ブームがおこる

※ 昭和27年 沖縄航路開設により生活用品が主要品になった

昭和52（1977）年		
	品 名	価 額
1	船舶類	197,927,411
2	原動機	20,350,056
3	金属製品	6,613,841
4	工業機械	2,923,623
5	みかん（缶詰）	1,244,031
	総 額	231,254,204

昭和55（1980）年		
	品 名	価 額
1	船舶類	62,014,644
2	原動機	32,213,900
3	工業機械	16,139,925
4	金属製品	16,050,911
5	重電機器	2,545,601
	総 額	137,096,183

平成21（2009）年		
	品 名	価 額
1	船舶類	165,093,137
2	一般機械	45,219,005
3	電気機器	30,798,999
4	金属製品	1,786,252
5	鉄鋼	1,482,488
	総 額	248,209,970

※ 昭和52年 船舶類が過去最高値

※ 6位のうんしゅうみかん（缶詰）が過去最高値（1,434,245千円）

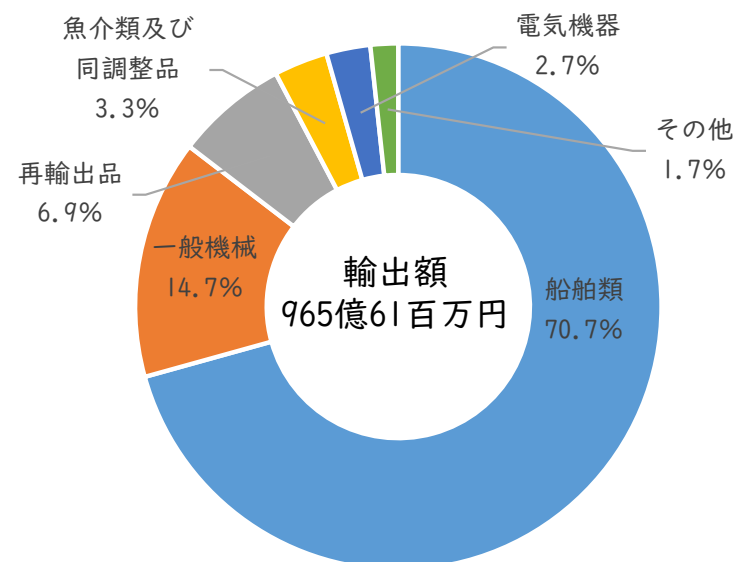
※ 平成21年 輸出額が過去最高値

2 長崎港の輸出動向 ～令和6（2024）年現在とまとめ～

○輸出品目上位5品目

令和6（2024）年		
	品 名	価額（千円）
1	船舶類	68,246,267
2	一般機械	14,202,774
3	再輸出品 ^注	6,710,628
4	魚介類及び同調整品	3,198,721
5	電気機器	2,646,842
	総 額	96,561,310

注、再輸出品とは、品目にかかわらず、一度日本に輸入された外国産貨物を、国内で消費することなく、そのまま再び輸出した貨物のこと



長崎港における戦前の輸出貿易は、缶詰・瓶詰食品、魚介類、馬鈴薯等の野菜が主要品目であり品目は多様化していました。

戦後すぐは、完全な政府間貿易を行っており、輸出はほとんどありませんでした。

昭和25（1950）年、完全に民間貿易に移行すると、船舶類、魚介類（缶詰）、電気機器など工業製品や水産物が輸出されるようになっていきました。

そのほか、昭和27（1952）年からは沖縄定期航路の開設により、同地向けの野菜、めん類から味噌、あめまでの食品類や陶磁器、はき物等の生活用品が主要品になりました。

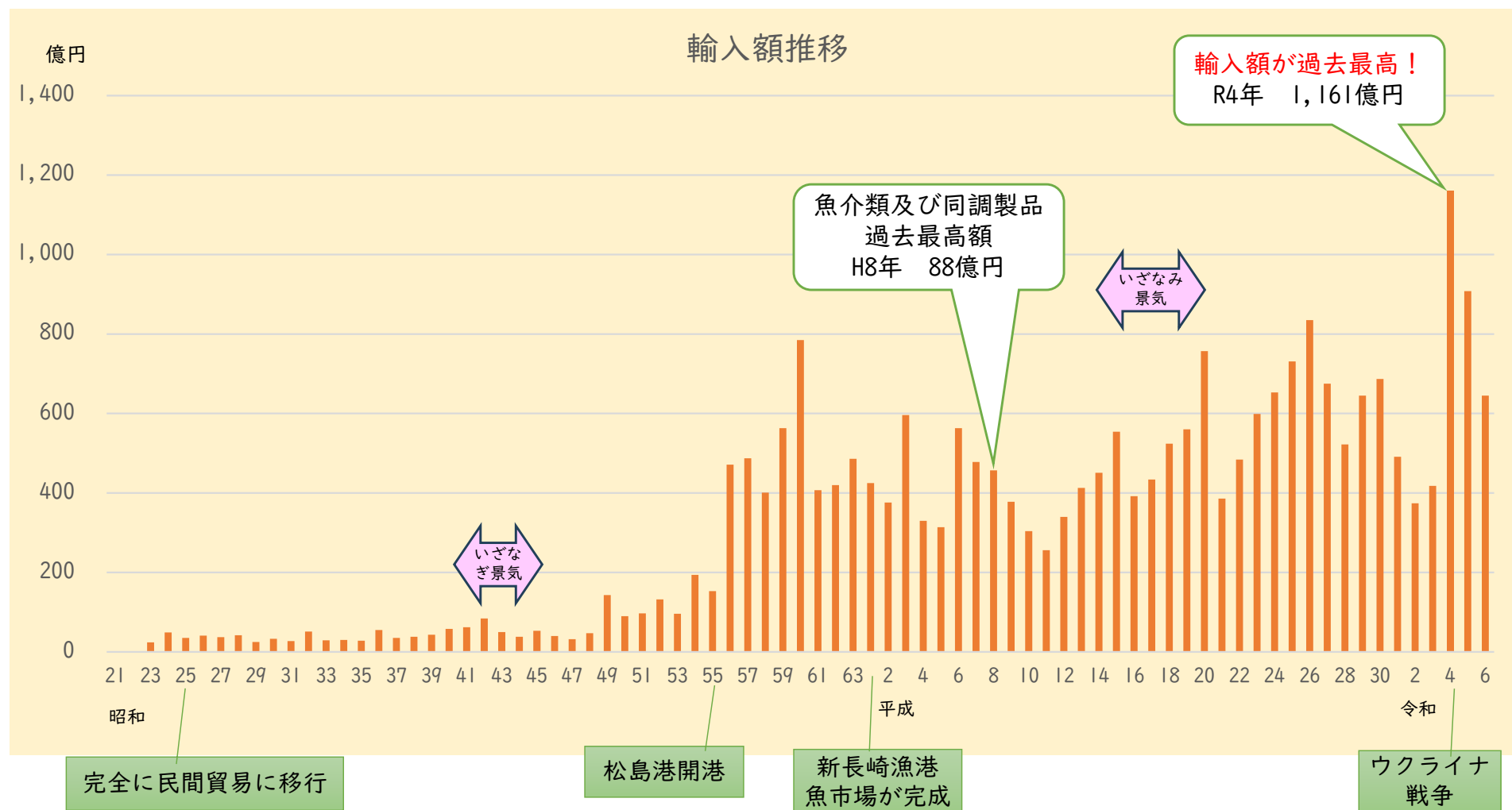
また、戦前まで石炭とともに中核をなしていたイワシ缶詰は、原料イワシの収穫減から衰退し、缶詰工場は、昭和30年頃よりみかん缶詰に転換しましたが、そのみかん缶詰も昭和62（1987）年には姿を消しました。

船舶類は、どの年代においてもおおむね上位に入っており、昭和52（1977）年に過去最高値となりました。その後の造船不況等により貿易額は減少したものの、現在でもほぼ首位となっています。

平成21（2009）年には、船舶類及び一般機械などの増加により過去最高の2,482億円となりました。

令和6（2024）年現在でも、船舶類、一般機械、魚介類及び同調整品などの工業製品や水産物が中心となっています。

3 長崎港の輸入動向 ～輸入額の推移～



民間貿易が全面的に再開された昭和25（1950）年の輸入額を基準とすると

令和6（2024）年の輸入額は **18.6倍！**

平成4（2022）年の過去最高値は **33.5倍！！**



3 長崎港の輸入動向 ～上位5品目の推移～

価額の単位：千円

昭和21（1946）年		
	品 名	価 額
1	小麦	25,391
2	小麦粉	16,599
3	食料品缶詰	13,587
4	豆類	9,186
5	鉱油	4,262
	総 額	70,625

昭和25（1950）年		
	品 名	価 額
1	精米	2,098,974
2	鉱油	534,645
3	小麦	403,580
4	化学肥料	347,376
5	大麦	70,207
	総 額	3,469,172

昭和35（1960）年		
	品 名	価 額
1	船舶	1,067,618
2	石油（その他）	918,198
3	機械類	305,012
4	飼料（ふすま等）	68,660
5	電気機器	63,092
	総 額	2,775,209

※ 解体船ブームで解体船や改造船が首位を占めた

昭和53（1978）年		
	品 名	価 額
1	重油	2,894,570
2	魚介類・同調製品	1,060,726
3	その他の機械類	1,027,461
4	電気機器	542,425
5	糖類・同調製品	484,849
	総 額	9,632,556

※ 昭和53年12月 イラン革命（第二次オイルショックへ）

平成8（1996）年		
	品 名	価 額
1	鉱物性燃料	20,326,914
2	魚介類・同調製品	8,822,597
3	金属製品	3,698,025
4	鉄鋼	2,932,932
5	一般機械	2,244,278
	総 額	45,781,358

※ 平成元年「新長崎漁港」魚市場が完成し、魚介類及び同調製品が平成8年に過去最高値となった

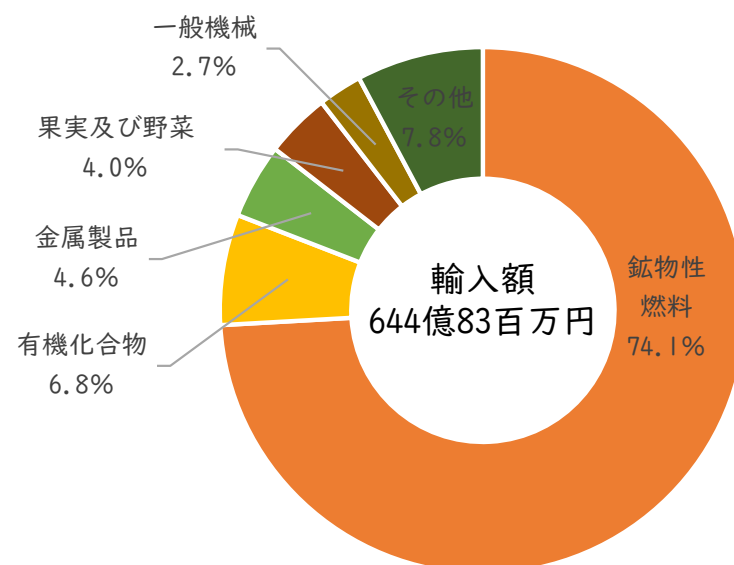
平成26（2014）年		
	品 名	価 額
1	鉱物性燃料	39,357,441
2	一般機械	14,770,002
3	電気機器	10,493,024
4	金属製品	4,786,956
5	化学製品	3,160,449
	総 額	83,482,094

※ 鉱物性燃料を除く輸入額が過去最高値（44,124,653千円）

3 長崎港の輸入動向 ～令和6（2024）年現在とまとめ～

○輸入品目上位5品目

令和6（2024）年		
	品 名	価額（千円）
1	鉱物性燃料	47,771,848
2	有機化合物	4,389,757
3	金属製品	2,955,177
4	果実及び野菜	2,582,663
5	一般機械	1,739,340
	総 額	64,482,919



長崎港における戦前の輸入貿易は、石油類、繰綿^{注1}、豆類、採油用種子が首位として登場し、次いで金属・同製品、豆糟^{注2}、機械類が主要品でした。輸入においても品目の多様性は長崎港貿易の特徴でした。

戦後になると、アメリカの援助物資として、小麦、小麦粉等の主食料を中心に生活必需品が急増し、全国輸入額の3%のシェアを占めましたが、以降、石油、米のほかに昭和30年代には、工業化の進展により、機械類が首位をしめるようになりました。

昭和35（1960）年には、当時の解体船ブームによる解体船や改造船の輸入が首位を占めていました。

平成元（1989）年に長崎新漁港が開港に追加指定され、魚介類及び同調製品の輸入が増加し、平成8（1996）年には過去最高額となったものの、その後は減少の一途をたどっています。

令和4（2022）年には、鉱物性燃料、金属製品などの増加により過去最高の1,161億円となりました。

令和6（2024）年現在では、鉱物性燃料、有機化合物、金属製品などの燃料や工業製品が中心となっています。

注1 繰綿（くりわた）… 綿花から種子を除いた繊維部分。

注2 豆糟（まめかす）… 豆類を加工する際に残るかす（粕）。

4 長崎税関を取り巻く戦後の環境変化

昭和16（1941）年12月8日に太平洋戦争が勃発、貿易統制令など軍事資材の輸送と荷役のスピードアップにウエイトをおきだし、ついには、昭和18（1943）年11月1日税関官制は廃止され、税関業務の一切を海運局（門司海運局長崎支局）に移管しました。

そして、昭和20（1945）年8月9日11時2分、原子爆弾が長崎市に投下され、海運局庁舎は甚大な被害を受けました。その約1月後にはGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が長崎税関庁舎を接收し司令部を置きました。

昭和21（1946）年6月に税関が再開され門司税関長崎支署となりましたが、長崎税関庁舎接收解除は昭和22（1947）年4月でした。接收解除とともに下り松庁舎より税関庁舎に移転しました。

再び、長崎税関として独立したのは昭和28（1953）年8月のことです。



～旧長崎税関本関～

昭和3（1928）年3月に建設され、昭和43（1968）年8月まで使用されました。場所は現在の長崎税関の場所と同じです。

玄関は御影石の柱、また、壁、階段の手摺は大理石造りで英国調のクラシックな建物でした。



～現長崎税関本関～

現長崎税関庁舎は昭和44（1969）年に竣工しました。

5 さいごに

貿易は、国内外の情勢や経済動向、産業の構造変化、社会背景の影響を受けて、その規模や取り扱われる品目などが変化していきます。

長崎港の輸出入品目及び貿易額は、戦後80年の時を経て大きく変化しており、今後も長崎港の貿易とともに輸出入品目や貿易額がどのように変化していくのか注視していくとともに今後の更なる発展を期待しています。

また、本特集を作成するにあたり古い資料を参考にしましたが、戦後の混乱期においても貿易額や品目がわかる資料が作成されていることに感動しました。戦争のない平和な世の中でこそ貿易は発展し、税関業務が遂行できていることを忘れないようにしたいものです。

※ 本資料において、昭和55（1980）年以降、長崎港には松島港を含みます。

また、輸出入申告官署の自由化（平成29年10月8日）以降、長崎港の貿易額は、長崎税関本関が管轄する区域に蔵置された貨物の通関額としています。

※ 統計数値は、2024年は確々報値です。1978年以前の数値は、「貿易統計からみた長崎港138年の歩み（長崎税関発行）」を参照しています。

※ 本資料作成にあたり、過去の品目の集計方法が異なっているため、品目の紹介方法が異なっているところがあります。

※ 統計数値の単位未満は、四捨五入を行うため、総数の内訳の計が一致しない場合があります。

本資料に関する問い合わせ

長崎税関 調査部 調査統計課

電話 095-828-8659（直通）

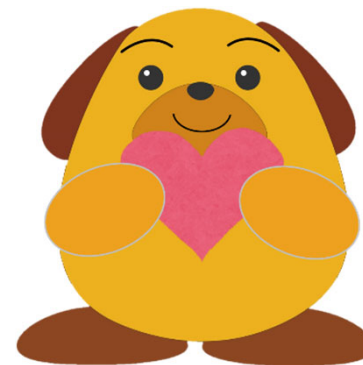
メール nagasaki-toukei@customs.go.jp

〒850-0862 長崎市出島町1番36号

長崎税関ホームページ <https://www.customs.go.jp/nagasaki>



※ 本資料を他に転載する時には、長崎税関の資料による旨を必ず注記して下さい。



～資料Ⅰ～ 長崎港の貿易額の推移

単位：億円

和暦	S21	S22	S23	S24	S25	S26	S27	S28	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	S36	S37	S38	S39	S40
西暦	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
輸出額	0	1	0	2	33	21	15	72	26	46	122	172	203	210	116	184	114	172	255	257
輸入額	1	7	24	49	35	40	37	42	25	33	27	51	29	30	28	55	35	38	43	58

和暦	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60
西暦	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985
輸出額	216	322	372	335	486	704	539	1,107	1,843	1,702	1,393	2,313	1,403	1,202	1,371	1,149	1,532	1,080	2,369	1,800
輸入額	62	84	50	38	53	40	32	47	143	90	97	132	96	194	154	471	488	402	564	785

和暦	S61	S62	S63	S64	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17
西暦	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
輸出額	1,224	966	699	827	1,554	1,375	1,685	1,584	1,858	1,398	1,897	1,467	2,448	1,483	1,481	1,020	1,389	1,074	2,231	1,293
輸入額	407	420	486	425	376	595	330	314	563	478	458	378	304	256	340	413	451	554	392	434

和暦	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5	R6
西暦	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
輸出額	2,092	2,112	2,280	2,482	2,170	1,546	1,192	1,102	1,789	1,011	1,952	1,639	1,579	1,706	589	408	450	885	966
輸入額	524	560	757	386	484	599	653	731	835	675	522	645	687	491	374	418	1,161	908	645

～資料２～ 戦後の長崎港の主な出来事

年（年号）		主な出来事
1952（昭和27）年	6月	沖縄定期航路開設により沖縄貿易開始（S32.7寄港中止）
1953（昭和28）年	7月	指定保税地域指定（出島地区）
1972（昭和47）年		小ヶ倉柳地区外貿埠頭完成
1985（昭和60）年	7月	港域を拡大（香焼地区を追加）
1990（平成2）年	9月	長崎・福州定期貨物船航路開設（H11.12運休）
1994（平成6）年	6月 12月	長崎・中国上海航路51年ぶりに復活（H9.1運休） 港域を拡大（新長崎漁港を追加）し、長崎三重式見港に改称
1995（平成7）年	8月	小ヶ倉柳地区の指定保税地域追加指定
1997（平成9）年	11月	長崎・中国福州航路再開（フルコンテナ船）（H11.12廃止）
1998（平成10）年	2月	小ヶ倉柳埠頭コンテナヤード拡張
1999（平成11）年	7月	韓国釜山との間に定期コンテナ航路開設
2017（平成29）年		小ヶ倉柳埠頭のガントリークレーン供用開始
2019（令和元）年		小ヶ倉柳埠頭の拡張整備が完了